

からそれぞれ1件、宮崎県西米良村から2件であった。これらのうち、菊池渓谷周辺の2件は大野ほか(2010)が報告したものと同一である。

1990年代以降の新たな生息記録(図1の●)として、巣箱自動撮影法6件と文献調査1件が得られた。巣箱自動撮影法では、熊本県内の3地点、すなわち山鹿市(矢谷渓谷上流)、阿蘇市(菊池渓谷上流)、山都町(内大臣渓谷)(それぞれ地点A~C)と、宮崎県内の高千穂町(祖母山)の3地点のすべて(それぞれ地点D~F)でヤマネが撮影された。一方、熊本県内の6地点(図1の×)、すなわち、熊本市(天狗山)、宇城市(大岳山麓の2カ所)、氷川町(立神)、八代市(古麓)および水俣市(冷水山)(それぞれ地点G~L)ではヤマネは撮影されなかった。これら6地点のうち、地点HとIを除く4地点において、ムササビ(*Petaurista leucogenys*, 齧歯目リス科)が撮影された。また、文献調査では、熊本県湯前町の山林(北緯32.26度, 東経130.99度; 図1の地点M)における2008年10月3日のヤマネの目撃と写真撮影の記事(湯前町役場総務課 2008; 浅田 徹私信)が見出された。

## 考 察

目撃情報は、既存のヤマネの生息記録(安田・坂田 2011)の周辺だけでなく、それらの間を埋めるように分布し(図1)、本種の潜在的な分布をより詳しく把握する上で重要であった。本研究で明らかとなった熊本県におけるヤマネの分布(図1)は、吉倉(1984, 1988)が報告したものとよく一致したが、以下の2点で異なっている。

第一点は、山鹿市(矢谷渓谷上流)という新産地の発見である。本地域周辺において約30年前に行われた調査(吉倉・荒井 1978)ではヤマネの生息は確認されなかったが、2007~2008年の調査(安田ほか 2009)では樹上に仕掛けた巣箱内に残された巣材(コケ類)から本種の生息が予想されていた。本調査地は、福岡県との県境をなす筑肥山地に、ある程度連続的に老齢天然林が分布する国有林であり、安田・坂田(2011)が予想した、ヤマネにとって好適なハビタットの条件(攪乱の規模の小ささ、森林の連続性の高さ)を満たしている。このような条件を考慮して調査地を選定することで、本種の新たな生息地をより効率的に発見できるようになるだろう。

第二点は、過去に知られていた一部のヤマネの生息地から近年の生息情報がないことである。吉倉(1977)は、阿蘇周辺のヤマネの生息地として小国町、南小国町、産山村の山地と南外輪山(高千穂野)を挙げている。これ

らの地域では近年、現地調査がほとんど行われていないため情報が乏しい。今後、県北や阿蘇外輪山に残る天然林を対象とした生息調査を行う必要がある。

海岸線に近い調査地(図1の地点G~L)からはヤマネの生息が確認されなかった。この理由として、調査地点数や調査努力量が不足していた可能性もあるが、これらの森林が過去に人為的な強い攪乱を受け、現在は孤立しているために、過去にヤマネが絶滅し、その後の再移入が起こらなかった可能性が考えられる。一方、ムササビはヤマネの生息が確認されなかった6地点のうち4地点に生息していた。本種はヤマネよりも大型の樹上性哺乳類であり、滑空による高い移動能力をもつので生息地の孤立化の影響が少ないのだろう。

坂田ほか(2011, 2012)は、八代市の市街地に近い若齢広葉樹二次林(図1の地点N)において、巣箱自動撮影法によりヤマネの生息を確認した。この調査地は、現在の林相や樹高からみて比較的近い過去に伐採等の人為攪乱を広域的に受け、その後、人手が加えられて再生してきた森林(いわゆる里山)であるが、国見岳から延びる九州山地の支脈の西端に位置し、人工林と天然林からなる背後の広大な森林地帯と連続している。このことは、一度、人為的な環境変化によってヤマネの個体群が消失した地域であっても、森林の連続性が高く維持されていれば、植生の回復とともに周辺の残存個体群から速やかな個体の分散が見込めることを示唆している。一方、地点Nから近い2カ所の調査地(図1の地点JとK)では同様な方法でヤマネの生息を確認できなかったが、その理由は不明である(坂田ほか 2012)。今後、ハビタットの質や量、ならびにそれらの分布の時間的変化を評価・予測し、ヤマネの保全を考えていくことが課題である。そのためには、個体群動態や分散能力といった九州におけるヤマネの基礎的な生態についても研究を進める必要があるだろう(大野ほか 2011)。

本研究により、本県におけるヤマネの分布がより詳細に明らかとなり、今後の調査が必要とされる地域が特定され、調査地選定の目安が示された。近年の野生動物の調査技術の進歩はめざましく、最新の調査技術を活用することにより、絶滅のおそれのある樹上性哺乳類の新産地が九州各地で発見されてきている(安田・山口 2008; 安田・栗原 2009; 坂田ほか 2010, 2011, 2012)。これまで天草諸島を含む島嶼からは、ヤマネ(図1)のみならず、いかなるリス科の樹上性哺乳類の生息も報告されていない(吉倉 1978)が、目撃情報を収集し、有望な森林において巣箱自動撮影法を適用することで新知見が得られる可能性はあるだろう。

## 引用文献

- 阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明. 2008. 日本の哺乳類. 改訂2版. 東海大学出版会, 秦野, pp 206.
- 大野愛子・安田雅俊・井上昭夫. 2010. 菊池溪谷の野生哺乳類. —吉倉・荒井(1982)の調査から30年後の状況—. 熊本野生生物研究会誌, (6) : 1-12.
- 大野愛子・安田雅俊・井上昭夫. 2011. ヤマネ *Glirulus japonicus* の捕獲法の検討と日内休眠の観察. 九州森林研究, 64 : 69-71.
- 坂田拓司・安田雅俊・長峰 智. 2010. 熊本県水俣市大川におけるニホンモモンガ *Pteromys momonga* とヤマネ *Glirulus japonicus* の確認. 熊本野生生物研究会誌, (6) : 23-28.
- 坂田拓司・安田雅俊・中園敏之. 2011. 熊本県の樹上性齧歯類を対象とした巣箱調査と巣箱自動撮影調査. リスとムササビ, (26) : 8-12.
- 坂田拓司・安田雅俊・中園敏之. 2012. 八代市竜峰山周辺における樹上性哺乳類の生息状況. 熊本野生生物研究会誌, (7) : 17-24.
- 安田雅俊・田中 浩. 2008. 中国地方と九州地方のニホンリスとニホンモモンガの研究と課題.—日本哺乳類学会2008年度大会自由集会報告—. リスとムササビ, (21) : 15-17.
- 安田雅俊・古家明敏・藤原佐保子. 2009. 熊本県山鹿市における哺乳類の分布. 熊本野生生物研究会誌, (5) : 1-9.
- 安田雅俊・栗原智昭. 2009. 自動撮影カメラで記録された宮崎県椎葉村のニホンモモンガ. 熊本野生生物研究会誌, (5) : 31-35.
- 安田雅俊・坂田拓司. 2011. 絶滅のおそれのある九州のヤマネ. —過去の生息記録からみた分布と生態および保全上の課題—. 哺乳類科学, 51 : 287-296.
- 湯前町役場総務課. 2008. 天然記念物「ヤマネ」発見! 広報ゆのまえ, (329) : 14.
- 吉倉 眞. 1977. 阿蘇の動物(脊椎動物). 阿蘇国立公園園学術調査報告書, 熊本県, 熊本, 35-69 pp.
- 吉倉 眞. 1978. 天草の哺乳類. CALANUS, (6) : 1-9.
- 吉倉 眞. 1984. 熊本の陸生哺乳動物. (1)研究史と陸生哺乳動物目録. 土龍, (11) : 27-55.
- 吉倉 眞. 1988. 熊本の陸生哺乳動物. (2)分布と実態. 土龍, (13) : 100-117.
- 吉倉 眞・荒井秋晴. 1978. 哺乳類調査. 迫間川流域の自然環境調査, 熊本洞穴研究会, 熊本, 113-135 pp.

---

受付日: 2012年2月22日 受理日: 2012年4月3日

連絡先: 安田雅俊

〒860-0862 熊本県熊本市中央区黒髪4-11-16  
森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ  
ファックス 096-344-5054  
電子メール yasuda@mammalogist.jp